

金雀児

阿羅本 景

えにしだ
金雀児の下で、白い吸血姫が佇んでいた。

春の宵闇の中で、金雀児は月の明かりを僅かに受けてその柔らかい花を枝に並べている。垂れて下がる枝を片手で受け、アルクエイドはその花を寄せた。

白い指が金の花をなぞり、そして離れていく。

夜の公園を小走りに走る志貴は、金雀児の木の下のアルクエイドを見付け、立ち止まつた。

そこにいたのはいつもの気取りのない服装のアルクエイドだが、こうやつて花と戯れる少し離れて見る彼女の姿は神々しくもあり、声を掛けるのを躊躇われる。志貴はそんなアルクエイドを呼ばうとし、つい呼びそびれて立ち尽くす。

薄く憂慮の浮かぶ顔を、志貴は黙つて見つめていた。

花の中のアルクエイドは、足音を感じて志貴を振り向く。垂れる枝を払い、芝生を踏んでアルクエイドはやつてくる。志貴は花のと戯れるアルクエイド見とれたようによーっと眺めているが、近づく彼女に気が付いて軽く仕草をする。

「や、アルクエイド——
「おーそーいっ！志貴っ！」

秋葉は、こうやつて夜な夜な志貴が出掛けることを快くは思っていない。
志貴が遠野邸を抜け出す時に見つかる確立は五分と言つたところであったが、見つかつたときの小言は以前と変わりがない。

出会い頭の一言に、志貴は言葉に詰まる。腰に手を当ててむ、とばかりに頬を膨らましたアルクエイドは、志貴の眼鏡の弦にあたらんがばかりに指を眉間に突きつける。あ、こいつの爪はこんなに形がいいのか——などと注意の反がちな志貴であつたが、アルクエイドの紅い瞳が己の目を捉えているのを知り、注意を戻す。

さらに、何度説教されてもアルクエイドの元に通うのを止める志貴ではない。

アルクエイドはしばし口を閉ざし、真剣な顔でじーっと志貴の瞳を見つめている。魅惑の色も何もない、ともすると人間らしさが無くも見える紅い瞳であった、僅かな間をおいて目尻が下がる。
「……志貴は、どーしてこう約束が守れないのかな、って思うんだけど……どうして？」
アルクエイド流の答えづらい不可思議な問いかが発せられるが、それにすぐ答えを持ち合わせている志貴ではない。うう、まあまあ、などと口の中で歯切れの悪い言葉を呟く志貴であったが、やがて頭を下げて謝りだす。

「御免、アルクエイド……いろいろと家を抜け出すのが大変で……」
「ふーん……私との約束守れないって事じやないよね」

なんとなく寂しそうなアルクエイドの言葉に、馬鹿言え、と志貴は笑つて応える。その言葉に、アルクエイドもつられるように僅かに笑う。
「お前との約束、守つただろ、ちゃんと……今日は悪かった。秋葉が俺が出ていこうとする引き留めて、いろいろお説教を……」

遠野家の長男としてみつともない、と言うことから始まって秋葉が如何に兄を大事に思っているのか、という事までを説教する秋葉であつたが、最近はそれに対して反省の色の見られない志貴に対しての苛立ちも交じつっていた。

そが、とアルクエイドは頷いて頭をぽりぽりと指先で搔く。

「うーん、志貴にはあの妹が居るから……あのいけ好かないバチカン女も厄介だつたけど、志貴の妹も困つたものねー」

アルクエイドと秋葉の遭遇の機会は、今の段階ではごく限られていた。どちらかというと、志貴がその機会を極力排除するために動いているのであり、言い換えるならアルクエイドと秋葉が直接激突するのを回避するために日々志貴は館を抜け出し、秋葉に小言を言われ続けているのであつた。

そんな志貴の気苦労を知る術はないアルクエイドは、目の前の志貴の顔に浮かんだ困り果てた苦笑いを、小首を傾げて見つめている。

アルクエイドは興味深そうに志貴に尋ねる

「ねえねえ、志貴……妹は私のことどう思つてるの？」

「どうつて……？」

そう聞かれた志貴は言葉を失う。思い返してみれば、過去限りなくアルクエイドのことで怒られている志貴であったが、秋葉がアルクエイドのことをどうこうと語ることはごく限られていた。

ただ、あの女性は普通でない——ということを口にする事はあっても、秋葉のアルクエイドに対する感情は直接に聞いたことがない。

——さて、実際秋葉はどう思つているのやら。

思わず秋葉のことを考え込んでしまった志貴に、アルクエイドのはほんと話しかける。

「んー、私もあんまり好かれてはいないんじゃないのか、とは思うけど。何しろほとんど会つたことがないから、私も妹の人となりには自信がないの。

あ、でも妹はむしろ普通の人間より私たちに近いんだから、もしかしたら……」

「私たちって……俺も入るのか？」

交互に自分とアルクエイドを指さしながら、志貴は苦笑いして尋ねる。
そだよ、とアルクエイドは頷いたかと思うと——

「だつて、志貴ほど完璧な殺人鬼は世界にはいなし、私も真祖だし、妹は妖の系脈の継承者でしょ？それに、志貴の家のメイドさん達も共感者みたいだし……されど普通の人間、と胸を張つて言えないと思う」
「……その中で一番人間からほど遠いお前に言われるのは、なんか複雑なモノがあるな」

偽らざる感想を口にする志貴に、食つてかかることなくアルクエイドはあはははは、と朗らかに笑つていた。

「だから、妹とも仲良くなきやいけないと思つうんだけど……」
「……秋葉の方はそう思つてゐるかどうか、自信はないな」

志貴はそう言うと、眉間に皺を寄せる。自分がこのアルクエイドとつき合つているということは、ロアの戦いの日々の中でシエルに対しても口にしたことはあったが、秋葉にはまだはつきりとと言つたことがない。

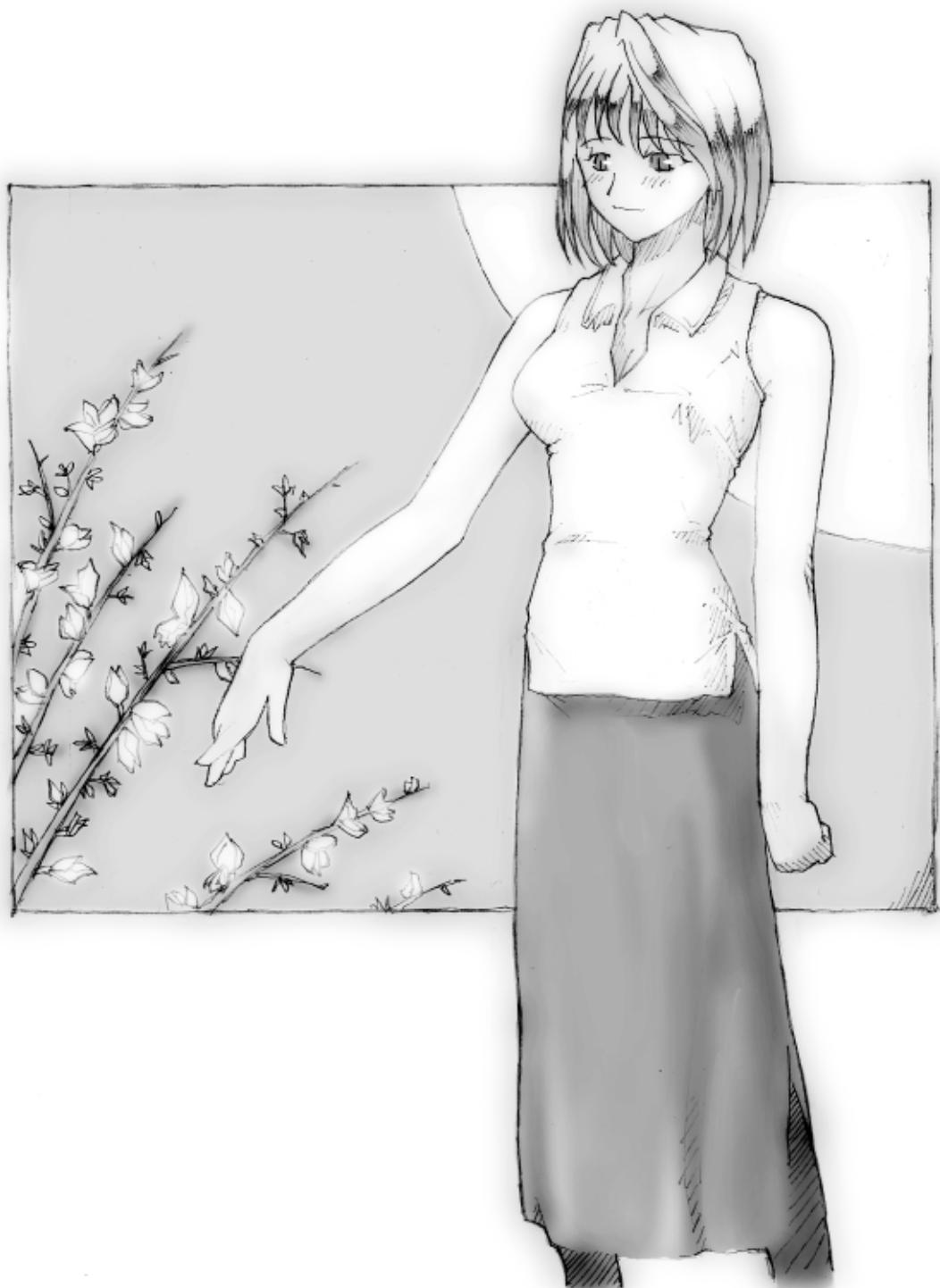
そんなことを考えて、志貴を察したのか、アルクエイドは腰をかがめて志貴の顔を覗き込む。白い頬と金の髪の顔に見つめられて、志貴はつい考え込んでいた顔を上げる。
紅い瞳が、志貴を眺めている——この瞳が無ければ、アルクエイドが吸血鬼であることを忘れそうになるほど隔離のない彼女の、表に現れた異形の証。

志貴は、その瞳に見入つていた。

「——志貴、今日のこれから、だけど……」

「……ぶらぶらしてから、お前のマンションに行くつていう？」

「うん、それだけど……変えて良いかな？」



そうアルクエイドに聞かれ、志貴は答えに迷つてつい黙り込んでしまつた。志貴も男であり、夜の情交の期待が変わるとなると自然と態度を留保してしまう。僅かに顔色が曇つたように見えた志貴に、アルクエイドは拗ねてみせる。

「今日も志貴は遅れたんだから、私のお願ひを聞いてくれても……」「OK、分かった。で……どうする?」

志貴は、そんなアルクエイドに笑つてみせる。アルクエイドのことだ、どうせ他愛ないお願ひなんだろ——そう思いこんでいた志貴は、次の言葉を聞いて己の耳を疑つた。

「……志貴の家に行きたい」

その言葉が意味する内容を、まず志貴は理解できなかつた。
目の前でもじもじするアルクエイドを見つめながら、志貴は自分が聞いた言葉を内容を考えながら、うん、ともふむ、とも付かない相づちを打つていた。

志貴の焦点がずれたレンズのような困惑の意識の中を、アルクエイドの声が響く。

「それで、妹に会つて二人ともお付き合いしているつて言つた方が、これからのも良いんじゃないのかなあ、つて思うけど……大丈夫、志貴?」

アルクエイドの話の途中辺りから、志貴にもその言葉が意味する内容がようやく理解できてくる。アルクエイドの口走る話の内容は、秋葉とアルクエイドが志貴の事に関して話し合いたい、ということであり、それは……

——んな、馬鹿な。

思わず蒼白になる志貴。ざあああ、と血の気が顔色から引いていき、突然肋骨が締め付けられて息が出来なくなるような焦りに志貴は襲われていた。思わずしゃがみ込みかねないほど具合の悪そうな志貴を、アルクエイドは心配そうに見つめている。

「……志貴、大丈夫? 顔色悪いよ?」「いや、そんなことはどうでも良い……アルクエイド、お前、それ……」

正気か?と聞きそうになつた志貴であつたが、その言葉を口にするには息が足りなかつた。にわかに体温が下がるような感覚に襲われ、膝が泳ぎ足下がおぼつかなくなる中で、志貴は必死に考える。

アルクエイドが秋葉に俺のことを言つたら——恐らく、秋葉はアルクエイドに対して激發する事はないだろう。だが、俺に対し何と言ふかは分かつたもんじやない。きっと、二人の仲を許さないとか言つて俺に禁足を掛けるか、さもなくば地下にあるという座敷牢に俺を閉じこめるだろう。

そうなると、アルクエイドが館を襲撃して——秋葉が迎撃して、後は——

——まずい。限りなくそれはまずい

自分の中でどんどん悪い方向に向かう想像に焦り、ゼーゼーと荒い息をしながら志貴は流れる冷や汗を拭う。

一方、そんな真っ青な志貴を眺めるアルクエイドは、にこにこ笑いながらのほほんと志貴の答えを待つてゐるものであつた。

「あ、アルクエイド……待て、それだけは待つてくれ」

思わず震え出す声で、志貴はアルクエイドに手を上げて押し止める。顔色の悪い志貴の仕草を見て、アルクエイドは首を傾げてえー、と声を上げる。

「志貴、どうして……」「アルクエイド……その、秋葉がお前とのことを許すと思うか?」「……?」

アルクエイドは震えながら喋る志貴を見つめて、む、と機嫌を崩したように頬をふくらませる。それは自分のことを秋葉にどうこう言われていることよりも、自分

の意図を志貴が承伏しないことに苛立ちを憶えているからであった。

志貴は、震える指で眼鏡を直すと、なんとかアルクエイドを説得しようとするが、その前に、アルクエイドが不思議そうに尋ねてくる。

「え？ 妹は私はそんなに好きじゃないかも知れないけど、志貴の事だから問題ないんじゃないの？」

「……」

「それに、妹はきっと許してくれるって。ねえ、志貴？」

どうしてお前はそんなに自信満々なんだ……と唸つて座り込んだくなる志貴であつた。アルクエイドは袖をひっぱつてねーねー、と気を引こうとするが、志貴はそんな彼女に聞かせる言葉を探している。

「あのな、アルクエイド」

「え？ なになに？」

「いつも、秋葉が俺に何を言つているかお前は知ってるのか？」

その間に、ううん、知らない、と明るく切り返すアルクエイド。
それに思わず額に手を当てて俯いてしまう志貴であつた。

「…………なに？ もしかして妹って、私のこと、悪く言つているの？」

「いや、お前のことはあまり言わないけどな。こうやつて付き合つてているのをいろいいろ……むしろ、俺の方がだらしないと言つて怒られてる」

その時の秋葉の言葉をすべてアルクエイドに聞かせたたくもある志貴であつたが、同時に聞かない方が万事平穀でもあつたとも思う。もつとも秋葉の口はアルクエイド自身のことにつれることは少ないが、誰かすだの惑わせるだの不穏な言葉が飛ぶこともままある。

「ふーん、じゃあ、志貴のためにもますます直談判しないとねえ」

腕を組んでうんうん、と頷いてみせるアルクエイド。志貴は、そんなアルクエイ

ドの顔を信じられない、と言う顔色で眺めるのが精一杯であった。

——こいつは、少し人の家庭事情を慮つてくれ

などと、人があらざる吸血鬼に対して見当外れなことを思わず考えてしまふ志貴は、はあ、と首を項垂れながら呻いている。なにしろ、自信満々のアルクエイドを押し止められそうな理屈が思いつかないのだから。

「だつて、ちゃんと二人の関係の事を認めてくれれば、志貴だつて不當に怒られなぐても済むのに……どうしてそんなに嫌がるの？」

「それは……だな……」

「それは…………いろいろ家庭の事情がある上に、俺はまだ学生だから……秋葉はこういうつき合いをするのはもつと後のことだと言つて」
「そう言う妹は志貴より年下よねー」
「それはそうだけど、そういうものではなくつてな。いろいろあいつには遠野家の体面とかそういう物があつて、簡単には認めてくれないわけだ」

説明になつてないな、とは思う志貴だが、アルクエイドの顔色を伺うとそこには口を結んで、目を細くする不機嫌そうな顔がある。

「それに、俺は秋葉を八年間放つておいた弱みがあつて……あいつのいい兄貴であつた事がない。だから、俺は秋葉になんとか気苦労はさせたくない——と、思つている」

そんなことをぼそぼそと口にする志貴と、無言のアルクエイド。
アルクエイドは志貴が秋葉のことを口にするのを聞き、顔を伏せて目を金の髪

に隠していた。志貴の口調に秋葉に対する隠しきれない哀切の色を感じ取ると、志貴に見えないようにほんの少し、唇を噛む。

「……志貴は、志貴は妹のことがそんなに大切なの？」

口調に恨みの色を込めないようとするアルクエイドであつたが、志貴はその言葉を聞いてすまなそうに目をそらす。そうだな——小さく口の中へ呟いて、志貴は首を振る。

「……わからない。お前も誰よりも大切だし、秋葉も……誰にも換えられない大切な。それに、あの翡翠や琥珀さんだつて大切……悪い……こんな事聞かせるべきじゃないけど……」

ざわり、と風が流れていく。風は金雀児の枝を揺すり、金の華がさわさわと鳴らし、花弁を惜しげもなく舞わせている。

アルクエイドは、伏せていた顔をそっと上げた。

志貴は息を飲む。

アルクエイドの紅い瞳は、真摯に志貴を見つめている。疑うことを見つめている。疑うことを知らない純粹な瞳は、瞬きすることなく見開かれていた。

闇の中で金にも見える黄色の花が舞い散る中、そんなアルクエイドは何よりも誰よりも美しく見えた。志貴は息を止めたまま、アルクエイドの言葉を待つ。

紅もさしていないのに朱に色づく唇が、言葉を形作る。

「……志貴。昔の私だつたら、何も言わないで志貴を魔眼で魅了して、志貴を奪つて逃げていつたに違いないのにね。でも、壊れる前の私だつたら、まず志貴にこんなに惚れることはなかつたかも」

そう言って笑つてみせるアルクエイドは、ひどく寂しそうであつた。夜の公園の中を舞い散る金の花びらのように、吹かれる風にさらわれ、暗闇の中に消えていく。そうな頼りなさがある。

闇の中にアルクエイドが溶け込んでいかないために、手を伸ばして抱きしめたくなる愛しさにも似た感情を志貴は抱いていた。

志貴の心の動きを察したのか、アルクエイドは志貴の前からするりと身を外すと、静かな足取りで金雀児の木の本に歩み寄る。志貴に背を向けたまま、アルクエイドは花の枝を手に取つた。

「志貴の話を聞いていて、怒るべきだったんだけど……志貴の事をそんな風に考えられないよ。私も……やっぱり壊されちゃつたのかもね、志貴に」

アルクエイドの口調には淡淡として、感情による抑揚や淀みはない。だが、その淡淡とした落ち着きが、それを耳にする志貴の心に逆に染み通る。泣いたり拗ねたりするより、今のアルクエイドの様子には遙かに——哀しさがあつた。

花の枝を手に取り、唇を寄せるアルクエイドに志貴は、ぽつり、と言つ。

「……約束、したもの。そいつは守らなくちゃいけないよな」

「お前の約束。お前を殺した責任を取るつて……そうだよな、まだ、何にも果たしちゃいなかつたよな」

ふーっ、と深く息を吐くと志貴は足を進め、アルクエイドの傍らに寄る。そして、驚いたような顔でじつとその姿を見つめるアルクエイドの視線の中で、ひよい、と腕を伸ばしてアルクエイドと同じ枝を手に取つていた。

金雀児。花言葉は清楚と上品。この金の花の下で佇む白い吸血姫に相応しい言葉を持つ花であることを一人は知らないが、ただ、言葉や知識ではない何かでその意味を感じ取つていた。

「悪かつた、アルクエイド……俺の方こそ逃げてたよ」

「……志貴？」

「行こう、秋葉の所に……決めた。秋葉にどういわれるかはわからないけど、いつか

はちゃんと言わないといけない事だもんな」

そう言うと、志貴は枝を離して手をアルクエイドの肩に掛ける。アルクエイドの折れそうな細い肩に手が掛かると、びくりと震えるが、すぐにその手の上にアルクエイドは手を被せた。

アルクエイドの囁き声と共に、ぎゅ、と白い指に力が籠もる。

「……ありがとう、志貴」

§

「志貴、それは逆よ……本当は私が妹にお願いしなきやいけないんだから」「……アルクエイド、そんなみつともない真似は止してくれ……ただでさえ俺には遠野家の中では威厳というモノがないんだから」

そんな志貴の言葉に、思わず吹き出してしまったアルクエイド。

遠野家へ向かう坂道の途中でも、二人は無言であった。どちらが先を行くでもなく、目線をちらりと会わせたかと思うとすぐに離す。お互いに何かを言い出そうとするが、その気になれば、口を噤む。そんなもどかしい距離を保ちながら、住宅街の坂を上りきり、遠野邸の門の前にまでたどり着く。

「……そういうえば、志貴と一緒に門に入つた事つてなかつたね」

そう、思い出すようにアルクエイドが呟くが、それに志貴も苦笑して頷いた。アルクエイドは、だいたい勝手に壁を乗り越えてやつてくるのだから。

アルクエイドと喋っているうちに先ほどまでの緊張が解けてきた志貴は、ゆっくりと玄関の扉を開け放つ。帰宅が遅くなることを翡翠には告げてあつたので、鍵は掛かっておらずに、重厚な蝶番のギー、というきしむ真鍮の音が玄関ホールに響き渡る。

扉の向こうには、玄関の常夜灯に照らし出されたホールが広がっていた。絨毯敷きの床に翼を広げる帝王階段、そしてその中に浮かび上がる影は――

「お帰りなさいませ、志貴さま。ようこそお越し頂きました……アルクエイドさま」「ホールの扉寄りに立ち深々と頭を下げる翡翠の姿に、思わず腰が引けてしまう志貴と、礼儀正しい翡翠にやあ、と屈託無く挨拶をするアルクエイド。翡翠は動搖の色を隠せない志貴の顔を一瞥すると、視線をその横の自信満々な白い美貌のアルクエイドに向ける。

「……本日は、ようこそお越し頂きました」

「うん、いつもは窓から志貴の所に入つているからね……迷惑掛けてごめんなさい」

二人は言葉も少なに夜の薄暗い庭園を横切り、水の枯れた噴水を脇目に玄関にたどり着く。観音開きの大扉を前にして、知らず立ち止まつて深く深呼吸をする志貴を、アルクエイドは笑つて見つめている。

「志貴つたら、まるでパーテーに招待される少年みたいね」

「……仕方ないだろ、この屋敷はいつになつても慣れないんだから……それに」

「……？」

「今の気持ちは、岳父に婚約の申し出をする新郎の心地……」

そう、謝つてゐるにしては反省の色のないアルクエイドに、翡翠は会釈してから改めて志貴に向き直る。翡翠の硬質の瞳に据えられ、志貴は背筋を伸ばして咳払い

をし、動搖を鎮めようと努力する。

翡翠が口を閉ざして志貴の言葉を待つ中で、ようやくのことで志貴の喉からうわずった声が絞り出される。

「翡翠、ご苦労様……ずっと待ってたのか？」

「いえ、姉さんが防犯装置で志貴さまがお帰りになられるのを確認して、お客様がいらっしゃるとの事なのでお出迎えに上がりました……」不満でしたら、下がりますが」

いかがでしょう？と尋ねる翡翠に急いで手を振りながら、翡翠の出迎えに感謝する台詞を口に乗せようとする志貴であったが、うまくいかない。そんな慌てた志貴の後ろから、落ち着いたアルクエイドの声がする。

「夜分遅くて申し訳ないけど、今日は妹……秋葉さんにお話があるの。今、いらっしゃる？」

気取りのないアルクエイドの言葉を聞き、翡翠はほんの少し、驚いたように瞳を見開くが、すぐにいつも通りの畏まつた翡翠の顔に戻り、アルクエイドと志貴の顔に目を走らせる。

その視線に気が付いた志貴は、アルクエイドの言葉を後追いする。

「そう、秋葉の事を……今、部屋にいるのか？相談したいことがあって」

「……志貴さまが、でしようか？それともお二人で？」

「ああ、琥珀さん……入っていいよ」

扉を開けてやつてきたのは和服姿の琥珀であつた。琥珀は応接間の二人の姿を認めるに、ここにこ笑いながらトレイを抱えてやつてくる。

「あら、今日はアルクエイドさんと……一緒ですか……お久しぶりですね」

「……志貴とこうやって一緒にだと、確かにね。今日は無理を言って志貴に連れてきて貰つたから……」

アルクエイドと志貴がお互の顔に見て頷くのを確認すると、翡翠は少し考えた後に頭を下げ、こう二人に告げる。

「畏まりました。応接間にお通しいたしますので、こちらでお待ちください……後ほど秋葉さまをお呼びいたします」

翡翠はくるりと背を向けると、二人の先を歩いてホールを横切り、応接間に通じるドアへと誘う。志貴は背を僅かに屈めて心配そうに、それと対照的にアルクエイ

ドは背をしゃんと伸ばして綺麗な歩調で絨毯を踏んでいく。

応接間に志貴とアルクエイドを案内すると、姉さんがお茶を持って参ります、と告げて翡翠はドアの向こうに消える。天井の灯りと壁の間接照明に柔らかく照らし出された部屋の中で、志貴はアルクエイドにソファを勧めた。

「……緊張してるね、志貴」

クッションを敷きながら腰掛けるアルクエイドは、手の甲で汗を拭う志貴を見て可笑しそうに笑う。これからどうなるか全く見当の付かない志貴は、そんな落ち着いた様子のアルクエイドを恨めしそうな瞳でつい見ててしまう。

横に志貴が腰掛けると、そつとアルクエイドは手を伸ばして志貴の額に触れる。冷たい指の感覚が染み込むのを、志貴は緊張の中でぼんやりと感じていた。

「それは、今は一生に一度の大舞台だからな……これが普通の場合なら『お嬢さんを俺にください！』と言つて土下座したりするんだろうけど、秋葉の場合にはどうしたらいいんだか」

「そんなに、緊張して深く考えること無いんじゃないの？志貴」

それはどうだろう、と応じる志貴の耳に、ドアがノックされる音が入つた。扉の向こうの声を聞き、志貴は琥珀だと判断する。

手際よくお茶の用意をする琥珀は、そうですかー?と朗らかに答える。そんな気負いのない女性二人を前にして、志貴は口を閉ざして足を組み替えたり腕を組んだり離したりと、落ち着かない素振りを見せていた。

その志貴の仕草を見、にこにこ笑うアルクエイドを眺め——琥珀はふ、と可笑しそうに頬を緩ませる。

「志貴さま?」

「……どうしたの? 琥珀さん」

差し出されるソーサーとカップをアルクエイドに回す志貴に、うふふふふふ、と意地悪そうに笑う琥珀が語りかける。

「おめでとうございまーす。どうとうございまーす! 決心をされたんですねー!」

その言葉に志貴はぎょっとして琥珀に向き直った。目は見開かれ口はあんぐりと開き、手もわなわなと震える志貴は、悲鳴のような声を上げる。アルクエイドは志貴の狼狽を見つめてきよどんとしているが、その言葉を上げた琥珀は落ち着いたものであった。

「こ、こ、琥珀さん! 一体何をつ!」

「まあ、そんなど大声を上げずに。私は純粹に志貴さまとアルクエイドさんを祝福して差し上げる心でおりますので、これからもよろしくお願ひしますね」

「話が分かるわね、あなたの妹にしては出来の良い使用人ね」

「いえいえ、過分なお褒めの言葉、恐縮ですー!」

そう言いながら、志貴越しにアルクエイドは右手をさしのべて握手しようとする。ぶるぶる震えたままの志貴を置き去りにしてその手を琥珀が取ろうとしたその時——

「お待ちなさい!」

ドアがまるで弾けるように開くと、そこに仁王立ちする一人の少女の姿。

黒い髪を靡かせ、二階からここまで走り抜けて来たために肩で息をしている。後ろに遅れてやつてくる翡翠を従える、怒れる美少女——言うまでもなく秋葉その人であった。

あらまあ、と眩き琥珀はそつなく壁際まで退く。

志貴は真っ青の顔で、仁王立ちの秋葉を震えながら見守る。

アルクエイドは——面白い、と言わんがばかりに不敵に笑う。

「……兄さん。これは、どういうことですの?」

怒りに打ち震える秋葉の言葉に、志貴はごくり、と唾を飲む。志貴は急いで左右を見回すが、先ほどまで話していた琥珀は壁際でしつとした顔で控えている。目を移すと、アルクエイドはやる気満々な高態度を見せてている。

う、と思わず狼狽の声を漏らす志貴に、秋葉は冷たく浴びせかける。

「今日も夜分のお出かけで遅くなると聞いていましたが、お早くお戻りになられて誠に重畳……ですが、お客様をお招きするとは伺っておりませんが? 兄さん」

秋葉の冷たい言葉に打たれて、志貴は自分が言うべき言葉を見失つて漏れる呻き声を喉で殺す。秋葉に怒られることを覚悟はしていた志貴ではあつたが、想像するのと実際に説教を浴びせかけられるのでは大違いであった。

おもわずくじけそうになる志貴であったが、ぐつとこらえて話を続出了。

「その……秋葉。折り入つて話したいことがある」

志貴の言葉に秋葉の片眉がぴくり、と上がる。

秋葉が手を振つて壁際の琥珀と背後の翡翠を下がらせようとするが、志貴はそれを押しとどめて話を続けた。

「秋葉、その……お前も前から知っていると思っているけど……」

秋葉は目を細くし、剣呑な様子で志貴を見つめる。秋葉は、アルクエイドを伴つた志貴が何を言い出すのかあらかじめ見当が付いていた——だが、ほんの僅かな彼女の中の希望が、予想を裏切る言葉を期待している。

志貴の唇を眺めている秋葉。だが、その僅かな期待も——

「俺、アルクエイドとつき合つてゐる。それを、秋葉にこの際ちゃんとと言おうと思つて」

勇気を出して言い切ると、志貴は息を止めて秋葉の顔を見る。

とうとう言つてしまつた——そんな感慨に耽る間もなく、志貴は目の前でみるみる表情を変えていく秋葉の表情にはらはらする。

秋葉は、その言葉を聞いて口を一線に結んで無言だった。黒く長い髪が風もない部屋の中でわざり、と動いたように見え、見る間に秋葉の目の周りが険しく変じてゆく。

すうー、と頸が上がる秋葉の背後に殺意にも似た波動を感じ、志貴は思わず身構えてしまう。

「兄さん……何を仰つているんです?」

「いや、だから……その……」

秋葉の声は落ち着いた声色であったが、その中にある溶岩のような熱い怒りは隠しようがない。まるで熱源からの熱風に煽られたように、志貴は秋葉の前に正対していられずに一步退いてしまう。

「兄さん……夜分に呼び出されたかと思つたら、そんな世迷い言を……」

秋葉は腰に手を当て、はつーとばかりに短く鋭い息を吐く。その様子に思わずびくり、と背をすくませてしまつた志貴。志貴の傍らにいるアルクエイドは秋葉に対しても薄く笑みを浮かべたままの顔を変えていない。

「アルクエイドさんと付き合つてゐるですつて?それが……私が許すとか許さないとか、私がそんな小姑じみたことを考へてゐるところですか?」

「……」

「はつ、全く兄さんと來たら、遠野の人間として人前に出しても恥ずかしくない一人前の男性になる前に、色恋にうつつを抜かすだなんて……恥ずかしくないのですか?」

畳みかける秋葉に反論の言葉がない志貴であつたが、内心もしお前は俺のお袋でもそんなことはいうまいに——と思つてはいる。だが、この剣幕の秋葉を前にそんな言葉を口の端に乗せるわけには行かない。

眉をつり上げて怒る秋葉の前に為すどころを知らない志貴は、目線をつい逸らしてしまう。その自信のない態度を前に、さらにくつてかかる秋葉の剣幕が応接間を震わせる。

「兄さん……何とか仰つて下さい!」

「……で、妹は許してくれるの?」

この、剣幕を全く気にしていないような平然とした声に、秋葉はぎょっとしてアルクエイドを眺める。

金髪紅眼の白い美女は、肩の力を抜いて立ち、いたつて穏やかな顔で志貴と秋葉を交互に眺める。

紅い目が——低く笑つてゐる。

「あ、アルクエイドさん……貴女は一体何を……?」

「んー、妹が許してくれると嬉しいんだけど……もつとも、それは志貴の都合だからね。私は構わないのよ、妹」

そう余裕に満ちた声でアルクエイドは、手をすつと伸ばしたかと思うと、傍らの志貴の首筋に回す。そして、志貴の様子も顧みることなく、そのまま腕を自分の元に引き寄せる。

その結果、アルクエイドは志貴の頭を抱き、自分の胸に押し宛てるように抱き込む形になる。にわかに抱き寄せられ、体重を崩した志貴はわあ、と驚きと抗議に似



た声を上げるが、自分の顔に宛われた柔らかいアルクエイドの胸の感覚に、その声を止める。

「もし妹が許してくれなかつたら——志貴は私のものだから、奪つて逃げるわ」「……そんな……貴女……」

不敵な宣告をするアルクエイドに、普段の秋葉なら怒号の一いつも浴びせかけるところであった。だが、秋葉の立てる殺氣にもひくともしないアルクエイドの余裕に満ちた態度に切り込む隙を見いだせずに、ついたじろいでしまう。

一方、志貴もこのアルクエイドの思いもしない宣告に目を白黒させるばかりであつた。アルクエイドの真意を問い合わせたくもあるが、この抱き込まれた恰好では情けなくてそんなことをする気にもなれない。

「ただ、私としても手荒なことはしたくないの。それに、妹も……志貴を失いたくないんでしょ?」

「……それは」

「ふふ、顔に書いてあるわよ、妹……私に志貴を奪われることが不安だつて。そんなに志貴のことが好きなら、貴女も素直になればいいのに」

心の中の隙をつかれ、思わず赤面して俯いてしまう秋葉であった。八年の歳月の間に志貴を思い続けていた秋葉には、他の人間に志貴を奪われるという危惧は常についた。アルクエイドの為に外出を繰り返す志貴を咎めるのも、その危惧の怖れの裏返しだつたのかも知れない。

紅くなる頬を押さえて俯く秋葉に、アルクエイドはさらに追い打ちを掛けれる。

「大丈夫よ、そんなことしないつもりだから。
志貴は、私と同じぐらい妹のことも大切に思つてゐる。それに私も、志貴と同じぐらい妹と仲良くなりたいの。妹は……私のことが嫌い?」
「……そんなこと、ありませんけど……」

柔軟な笑顔を浮かべるアルクエイドに、秋葉は俯きながらそう弱々しく答える。

秋葉はすっかりアルクエイドのペースに乗せられ、目線を逸らして紅くもじもじするばかりである。

アルクエイドは微笑みながらそんな秋葉を眺めている。そのまま抱き込まれる恰好の志貴は、先ほどから急にしおらしくなる秋葉を言葉もなく驚きの瞳で眺めている。

「じゃあ、志貴と一緒に仲良くして貰える?」
「……」

秋葉に言葉はない。アルクエイドは駄目押しとばかりに、抱えている志貴を促して秋葉に声を掛けさせようとした。柔らかい胸に顔の側面を埋めたままの志貴は、そのままの恰好で説いて聞かせるように話し始める。

「秋葉……アルクエイドと付き合つからお前と別れる、なんて事は言わないから——
「では、兄さん……約束してくれますか?
——ずっと、これから一緒にいてくれろつて。八年前みたいに居なくなつたりしないつて」

縋るような瞳で見つめる秋葉に、志貴は——頷いた。

ほ、と誰とも無く息を付く。それは志貴のものだつたのか、秋葉のものだつたのか、あるいはアルクエイドのものだつたのか。アルクエイドは志貴を胸元からようやく手放し、解放された志貴が軽く咳払いをした。

「じゃあ、秋葉……これからはアルクエイドのことも、よろしくな

その声を聞きながら、優雅な足取りでアルクエイドは秋葉の元まで進み寄り、す、と手をさしのべる。秋葉はその手をじつと拗ねたような瞳で見つめていたが、アルクエイドの横に志貴も一緒にやつてくるにいたつて、仕方なさそうに握る。きゅ、と黒髪の美少女と金髪紅眼の美女の手が結びあわされると——

「今日は、お祝いをしましょう!」

やおら、明るい琥珀の声が挙がる。この三人のやり取りの間、黙つて壁際に控えて一部始終を見守つていたのであつたが、ようやく事の成り行きが落ち着いたのを見るとほん、と手を叩いてそんな声を上げた。

え？」と首を傾げる志貴に、にこにこ笑う琥珀は言う。

「だつて、今日はこんなにおめでたい事があつたんです、お祝いしなきやだめですよ！」

「……え？ でもこんな時間だし……」

「すぐにお酒とお料理の準備をしますね、琥珀ちゃん、手伝つて？」

「姉さん、分かりました……よろしいですか？ 秋葉さま、志貴さま」

志貴は狐に包まれたように、はあ、と頗りない様子で頷く。

秋葉はしばらく口をへの時に曲げていたが、無言で二人の動きを促す。

使用人の琥珀と翡翠がそれぞれキツチンと配膳室に消えていく間、アルクエイドは秋葉の手を嬉しそうに両手で握つていたままであつた。

§ §

アルクエイドに連れられて、庭で夜風に当たる志貴は頭を軽く振る。
そして、月明かりの下で公園と同じように、庭に植えられた金雀児の木の下で佇んでいるアルクエイドの姿を見つめていた。

「私も志貴も、時間がないから……だから、一刻も長い時間を過ごせるようにしたかったから、逢瀬を邪魔をする妹を説得しなきやつて思つて」

アルクエイドの吐息の中に混じる言葉に、志貴は振り向く。

志貴は、思いもよらぬ事を話し出すアルクエイドを真剣な眼差しで眺める。

アルクエイドは、沖天の月を見つめて言葉を続ける。

「志貴は、あんまり長く生きられない——でも、私は悠久の時を過ごさないといけない。それに、私もそのうち……吸血衝動を抑えるために、今よりも長い眠りが必要になる。そうすると、志貴に会える時間は僅かになる。

べれけになつていくのを楽しんでいた。

宴会は、荒れ模様であつた。

傷心の秋葉は志貴にやたらに酒を飲ませようとする上に、そもそもアルコールの影響を受けないアルクエイドも面白半分に秋葉と志貴に酒を飲ませ、二人がへ

ウイスキーをストレートで干す秋葉は、志貴に絡みついて過去の所行に愚痴を垂れていたが、次第にアルクエイドに勧められた大量のアルコールに沈み、最後に

は呂律が回らない泣き上戸になり、志貴の胸元にしがみついて泣き出す始末であつた。

その時志貴は半分気を失つており、主役二人が潰れた祝いの宴は早々にお開きとなつたのである。秋葉は琥珀と翡翠に連れられ、志貴はアルクエイドに庭に連れ出されていた。

「志貴、大丈夫？」

花の下のアルクエイドは、そう志貴に尋ねる。大分時間が経ち、夜風が寒く感じる寸前の志貴はようやくのことで意識を取り戻していた。うん、と志貴は弱々しく答えた後で、傍らのアルクエイドを見つめる。

「しかし、今日のお前は——なんでこんな事しようとしたんだ？」

その問いに、アルクエイドはんー、と思案する顔になつたかと思うと、そつと悲しそうな顔に笑いを浮かべて答えた。

「だつて……時間がなかつたから」「……どういう意味だ？ それ……」

を作りたかった』

月を憑かれたように眺めるアルクエイドを、志貴は胸が締め付けられる思いで見る。

月姫——朱い月の吸血姫。本来違う世界の空氣の中に住まう一人は、一緒に過ごしていてもこんなに立つ世界の大地は隔てられている——

——アルクエイド、お前つて奴は

——そんなに大事なことを、先に言わないだなんて

どんなに大事なことでも聞かれないし喋らない。そんなアルクエイドの事を忘れていた志貴は、躊躇を噛む想いであつた。アルクエイドの切ない言葉は、まだアルコールにふやけた志貴の身体に染み込み、心を絞り上げる。

「アルクエイド……」

「何? 志貴?」

そんな志貴の心を知らないアルクエイドは、につこり笑つて振り返る。

無垢の吸血鬼。彼女に血を吸われ、死徒となつても永遠に共に過ごしたい——愚にも付かない考えが志貴の中に浮かぶが、それは誰も、特にアルクエイド自身が喜ばない事を知る志貴は妄想を心から追い払う。

——そうだな、こう言えばいいか……

「……馬鹿だな、お前」

「……むし、何よ、志貴!」

「今から思い出なんてしみつたれた事を言うなよ。一緒にお前と過ごすのは、蜜月なんだから」

その言葉にはつとしたアルクエイドは、志貴の横に座つてその腕を抱きしめる。

「うん、そうだね。志貴。一緒にこれからも過ごそうね」

「ああ、約束だからな。それが、俺とお前の間の約束だから——」

並んで座る二人の顔が、吸い付くように寄せられていく。
二人の唇が合わせられるその時——

月に照らされた金雀児の華だけが、二人を見守つていた。

《了》

お初でございます

えー、初めての皆様こんにちわ。
わたしは尚文と申します。
このたびは、お目汚しをさせて頂きました。
印刷モードは初挑戦なのでドキドキですね。



下記のSSはリレーもので、
葉鍵キャラ100人が島内
に放たれ殺し合いをすると
いう、その名も「葉鍵ロワイ
アル」なるSSです。

2chの葉鍵板にて展開中。
今では600話を越える、
悪ハリ、ココに極まれり！と
いったツツ化してあります。

人死にが許せない、という
モラリストでなければ、きっと
楽しめると思いますぜw



普段は、このページの
ようなCGをカラーで
描いております。
これくらいだと、印刷
したとき、どうなるの
でしょうかね…(汗)

挿絵のほうは、鉛筆で
下書きを行い、スキャン
したあとでいろいろと
いじっております。

いっぽん、手描きの
力ケアミとか縞線で
統一した方が見栄えが
よかったかもしれません

未熟ですんまそん…



毎度わたしです

相変わらず、のほほんとゲームしたり
絵を描いたり。

最近では「名無したちの挽歌」として
2chでSSなども書いております。